

# 『大鏡』道隆伝について

桑原博史

## 一 はじめに

道隆伝は、時平伝によく似た構造を持つ。内容を、取りあげている人物を基準として整理すると、『大鏡二』（完訳日本の古典）のテキストではじめから四二行（この行数は、一行のなかば以下は切り捨て、流布本による増補も除いている。以下、同じ）が道隆その人を取りあげたもの、以下四二行でその娘たち、一三行で長男道頼、次男伊周に触れる。ここまでは大臣伝の基本の語り方であるが、次に、

など言ひて、鼻うちかむほどもあはれに見ゆ。

と語りの場の再現があって、道長との抗争の具体例をあげて伊周を取りあげて行く。それは五二行にわたり、と気色だちて、このほどはうちささめく。

と、また語りの場の再現で結ぶ。そのあと、伊周の死とその子どもたちについて四一行で語り、ついで伊周弟の隆家について一〇五行にわたり述べて、最後に伊周・隆家以外の道隆の子孫たちに触れる八行があつて結ぶ。

内容構成として、二つの語りの場の再現にはさまれた伊周伝、分量として道隆伝中のほぼ四割強を占める隆家伝、この二つに特徴がある。道隆その人に触れることが少なく、伊周・隆家に大半の叙述をさいている所に、時平伝が肥大化した道真関係の叙述を持つところと似ているのである。

なお道隆伝は、総量としても道長伝に次ぐ分量を持っていて、道長の直接の政敵であった伊周・隆家兄弟に対

する扱いが重いことが明らかである。

## 二 道隆関係の記事について

道隆は、酒の飲みすぎが欠点の男であった。しかしその欠点に触れた一挿話を「祭のかへさ御覽すとて、小一条大将・閑院大将と一つ御車にて、紫野に出でさせ給ひぬ」と語って行くうちに、

やうやう過ぎさせ給ひて後は、御車の後、前の簾皆上げて、三所ながら御覽はなちておはしましけるは、いとこそ見苦しかりけれ。大方この大将殿たちの参り給へる、世の常にて出で給ふをば、いと本意なく口惜しきことに思し召したりけり。ものもおぼえず、御装束も引き乱りて、車さし寄せつつ、人にかかれて乗り給ふをぞ、いと興あることにさせ給ひける。

と、その身分にふさわしくない面を紹介して行く文章は、おのずから語り手がはばかりる気持ちをこめた「けり」叙述になる（拙稿「大鏡の語る方法と表現」説話第九号平成3・3）。

そのあと、

ただしこの殿、御酔ひのほどよりはとく覚むることをぞさせ給ひし。

と、よき例として、賀茂社参詣の時の行為を語る時、当時、大納言であった道長の目を通しての事実を伝える。

一の大納言にては、この御堂ぞおはしまししかば、御覽するに、夜に入りぬれば、御前の松の光にとほりて見ゆるに、御透影のおはしまさねば、あやしと思し召しけるに、参り着かせ給ひて、御車かきおろしたれど、え知らせ給はず。いかにと思へど、御前どももえ驚かし申さで、たださぶらひなめるに、入道殿おりさせ給へるに、さてあるべきことならねば、轅の外ながら、高やかに、「やや」と御扇を鳴らしなどさせ給へど、さらに驚き給はねば、近く寄りて、表の御袴の裾を荒ららかに引かせ給ふ折ぞ、驚かせ給ひて、さる御用意はならはせ給へれば、御櫛、笄し給へりける取り出でて、つくるひなどして、おりさせ給ひけるに、いささかさりげなくて、清らかにてぞおはしましし。

ここでは、車の外の状況は「き」で、車の内の状況は「けり」で表現されている。内外全体の状態が道長の見聞という設定である所に、特色があるのだが、それは小峯和明氏「大鏡の語り——菩提講の光と影」（文学一九八七／昭62／10）が、『大鏡』全体を見通す語り手としての道長の存在意味を明らかにしている通りである。こゝも、道隆の表と裏あるいは光と影を、弟道長がしっかりと見すえていた例証として、見聞者に道長を設定しているのである。

『大鏡』全体の主たる語り手は大宅世継だが、その世継の語りの中に多くの語り手がいるのが、作品の特徴の一つであるが、次の民部卿すなわち源俊賢（道長政権を支えた四納言の一人）も、その一人である。

この民部卿殿の、頭弁にて参り給へりけるに、御病いたくせめて、御装束もえ奉らざりければ、御直衣にて御簾の外にゐざり出でさせ給ふに、長押をおりわづらはせ給ひて、女装束御手に取りて、形のやうにかづけさせ給ひしなむ、いとあはれなりし。こと人のいとさばかりなりたらむは、ことやうなるべきを、なほいとかはらかにあてにおはせしかば、病づきてしもこそ形はいるべかりけれとなむ見えしとこそ、民部卿殿は常に宣ふなれ。

この結び「とこそ……宣ふなれ」が受ける内容は、「御直衣にて御簾の外に……いるべかりけれ（この「けり」は詠嘆）となむ見えし」の「き」叙述の部分であろう。これがいわゆる直接話法の部分であるが、冒頭の「頭弁にて参り給へりけるに……え奉らざりければ」は、間接話法で書き出されたために「けり」叙述になっているのである。こういう間接・直接の二通りの話法を組み合わせて一つの挿話を伝える方法は、道隆伝以外にもしばしば見うけたところである。

道隆の娘たちについて語っているところでも、

三の御方は、冷泉院の四の皇子、帥宮と申ししをこそは、父殿婿取り奉らせ給へりしも、後にはやがて御仲絶えにしかば、末の世は一条わたりにいとあやしくしておはするとぞ聞こえ給ひし。

まことにや、御心ばへなどの、いと落ち居すおはしければ、かつは宮も疎み聞こえさせ給へりけるとかや。

客人などの参りたる折は、御簾をいと高やかに押しやりて、御懷をひろげて立ち給へりければ、宮は御面うち赤めてなむおはしましける。さぶらふ人も、表の色たがふ心地して、うつぶしてなむ、立たむもはしたに術なかりける。宮、後には、「見返りたりしままに、動きもせられず、ものこそ覚えざりしか」とこそ仰せられけれ。

とある。

最初の一段落は、歴史的事実であるから「き」叙述、次の一段落は三の御方の欠点を指摘しているから「けり」叙述である。最後の段落も、欠点について触れているのだから「けり」叙述になったとも解釈できるが、宮の語りを間接話法にしたもの、とも解釈できる。その文末の「とこそ仰せられけれ」の「けれ」は、帥宮の言葉を世継が間接に聞いている、すなわち世継は宮とは直接言葉をかわす身分でないことを示している。さきの民部卿俊賢の言葉も、「常に宣ふなれ」とあって、世継の語りの中の語り手と、世継とのかかわりが、いつも考慮されていることがわかる。

### 三 伊周関係の記事について

引き続いて世継は、伊周について流罪の経緯を次のように述べる。

……御官位取られて、ただ太宰の権帥になりて、長徳二年四月二十四日にこそは下り給ひにしか、御年二十三。いかばかりあはれに悲しかりしことぞ。

されど、げに必ずかやうのこと、わが怠りにて流され給ふにしもあらず。よろづのこと身にあまりぬる人の、唐にもこの国にもあるわざにぞ侍るなる。昔は北野の御ことぞかし」

など言ひて、鼻うちかむほどあはれに見ゆ。

これを見ると、『大鏡』作者も明らかに菅原道真の先例を意識して、伊周の運命に重ね合わせようとしていることがわかる。世継が「……など言ひて鼻うちかむ」のは、「わが怠り」で流罪になったのではない人々に同情の

涙をそそいでいるからで、この語りの場の再現は、以下が伊周の側に身を置いた語りになることを予想させるものである。事実、このあとは「この殿（伊周）も、御才日本にはあまらせ給へりしかば、かかることもおはしますにこそ侍りしか」と語りはじめられるのだが、以下は実際には、伊周道長の供争い、双六の勝負、伊周臨終の時の道長への依頼の三つの挿話を通じて、直接に政敵であった道長側に身を置いた叙述をなして行く。そこが道真の場合とことなつた扱いになる。

藤原袈裟雄氏「藤原道長と大鏡」（国学院雑誌昭48・2）は、史実では道長にとつて手強い政敵であった伊周が、『大鏡』では無能な男と造型されていること、長徳の変やその契機となつた大口論、七条大路での乱闘などが一つも書かれていないことなどに注意して、それらはすべて道長の偉大さをきわだたせるための作為としている。そのことを承知した上で、『大鏡』の配置した挿話を見て行こう。

まず第一の挿話は、召還されたあとの伊周について、「いと見苦しきことのみ、いかに聞え侍りしもの」の例として、

内に参らせ給ひけるに、北の陣より入らせ給ひて西ざまにおはしますに……「やや」と仰せられけれど、狭き所に雑人はいと多く払はれて、押しかけられ奉りぬれば、とみにもえ退かで、いとこそ不便に侍りけれ。と「けり」叙述で語つたあと、「それはげに御罪にあらねど、ただ華やかなる御歩き、振舞をさせ給はずは、さやうに軽々しきことおはしますべきことかは、とぞかし」と、伊周に同情した感想を述べる。しかもその感想も、「とぞかし」と、世継自身の評価でなく、人々の噂による評価という含みを持たせて、微妙な感覚を伝えている。

第二の挿話は、

また入道殿（道長）、御岳に参らせ給へりし道にて、帥殿（伊周）の方より便なきことあるべしと聞こえて、常よりも世を恐れさせ給ひて、平らかに帰らせ給へるに、かの殿も……

と、道長に対して伊周を「かの殿」と遠い存在として語るところに、これが道隆、伊周伝であることを一瞬忘れ

ているかのようなのである。以下の語りも、明らかに道長側に身を置いて述べられて、「かやうのことさへ、帥殿は常に負け奉らせ給ひてぞまかでさせ給ひける」と、伊周の敗者ぶりにほとんど同情していないようである。

そして第三の挿話も、寛弘七年三七歳で伊周がなくなったという歴史的事実を「き」叙述で語ったのちに、かぎりの御病とても、いたう苦しがり給ふこともなかりけり。御しはぶき病にやなど思しけるほどに、重り給ひにければ、修法せむとて僧召せど、参るもなきに、いかがはせむとて、道雅の君を御使にて入道殿に申し給へりける。……いとたいだいしき御事にもあるかな」といみじう驚かせ給ひて「誰を召したるに参らぬぞ」などくはしく問はせ給ふ。なにがし阿闍梨をこそは奉らせ給ひしか。

と、伊周の臨終に修法の僧が誰もいないので、頼まれた道長が快く阿闍梨を派遣するという度量の広さを讃えた話である。その結びを「奉らせ給ひしか」としているのは、伊周側が遠い「けり」叙述であるのに対し、道長側に身を置いた結果「き」叙述になっているのであろう。

これらの挿話全体に対する語り手の感想は、次のようにある。

されど、世の末は人の心も弱くなりけるにや、「悪しくておはします」など申ししかど、元方の大納言のやうにやは聞こえさせ給ふな。また入道殿下のなほすぐれさせ給へる威のいみじきに侍るめり。老の波に言ひ過しもぞし侍る」

と気色だちて、このほどはうちささめく。

「人の心も弱くなりけるにや」と「……など申ししかど」との関係は、「ひさしくおはしますまじかりければにや、出家して失せ給ひにき」（兼通伝）と同じく、語り手の推測と事実とを組み合わせた言い方である。「元方の大納言」は、外孫の立太子の願い叶わず、藤原師輔らにたたった藤原元方をさす。元方のように死霊となつて伊周が怨みをはらさないのは、「世の末の人の心」の弱さであり、道長の威敵のすばらしさであると、語り手は批評している。

『小右記』長和四年一二月一三日の条には、伊周の霊が頼通にとりついたという情報が記されていて、諸注釈

書はこれを引く。しかし『小右記』は、道長の政敵小野宮実資の側が得た情報を記すのであって、道長・頼通側の体験としては伊周の霊の出現は記録されていない（『栄華物語』はこの時の霊は、具平親王とする）。『大鏡』作者も、伊周が死霊となつてたたらなかつたことを残念に思つて、「世の末は人の心も弱くなりけるにや、悪しくおはしますなど申ししかど」と世継に言わせているのである。

以上のように伊周を論じて、全体としては決して道長に不利なことを言つたり、きびしく指弾する所はない。にもかかわらず、世継が「老の波に言ひ過ぐしもぞし侍る」と結び、「このほどはうちささめく」と小声になるのは、なぜであらうか。これも、筆禍を恐れる作者の、そこはかとなし用心のなせるわざ、としてすませることもできる。しかし「筆禍を恐れる」ところに、伊周に対する思い入れが存在するのではあるまいか。伊周に触れた前段の結びにおいて、「昔は北野の御事ぞかし」と雷になって藤原氏にたたつた道真の例をあげ、そしてこの結びで伊周が道長一統にたたることの可能性に触れて、「元方の大納言のやうに」と先例となる人物の実名をあげる。そこには「御才日本には余らせ給へりし」伊周に対する同情が、語り手の心の底にある。それを意識しての「言ひ過し」をおそれたのではあるまいか。

なお、これらの挿話が、次に取りあげる隆家関係の挿話と、対比的な配列になつてゐることは、下谷雅美氏『大鏡』における伊周・隆家（『大和物語・大鏡探究』二松学舎大南海研究室昭60刊所収）のすでに指摘するところである。たとえばA（伊周関係の挿話をこの記号で示す）花山院事件によつて失脚・失意↓a（隆家関係の挿話をこの記号で示す）失意の中で帰洛、道長の弁明を受ける、B帰洛してのち道長に会い恥をさらす↓b道長邸で道長に慰められて気嫌を直す、C道長をおそれ縮して道長邸に参上する↓c一条帝のあと敦康親王の立太子実現せず帝を非難する。以下は紹介を略するが、一つずつずれた挿話の配列に、多くは道長とのかかわりにおいて、作者は隆家を高く評価し、伊周を低くしている、というものが下谷氏の結論である。全体としては確かにその通りであるが、伊周に関する挿話はよく読めば、底流に伊周を評価してその運命に同情を寄せたものがあることを、私は指摘したのである。

## 四 隆家関係の記事について

この帥殿の一つ腹の、十七にて中納言になりなどして、世の中のさがな者と言はれ給ひし殿の、御童名は阿古君ぞかし。

隆家について語り出すこの一文が、すでに彼に対する好感を示しており、隆家は『大鏡』作者好みの人物の一人だと言われている。しかしそれは、道長とのかかわりにおいて、そういう性格づけをされているものであることを、以下に述べたい。

隆家関係の記事は、いくつもの挿話からなりたっているが、第一は、罪を許されて帰洛したあと、道長の賀茂詣でに供奉した時の挿話である。

あまたの人々の下臈になりて、かたがたすさまじう思されながら歩かせ給ふに、御賀茂詣でに仕り給へるに、むげに下りておはするがいとほしくて、殿（道長）の御車に乗せ奉らせ給ひて、御物語こまやかなるついでに、「一年のことは、おのれが申し行ふとぞ、世の中に言ひ侍りける。そこにもしかぞ思しけむ。されど、さもなかりしことなり。宣旨ならぬこと、一言にても加へて侍らましかば、この御社にかくて参りなましや。天道も見給ふらむ、いと恐ろしきこと」ともまめやかに宣はせしなむ、「なかなか面置かむ方なく、術なくおぼえし」とこそ後に宣ひけれ。

それもこの殿におはすれば、さやうに仰せらるるぞ。帥殿にはさまざまもや聞こえさせ給ひける。

この挿話は、全体としては「けり」叙述で語られているのだが、「宣はせしなむ」が例外のように見える。しかしこれは本来「術なくおぼえし」と照応する、隆家の言葉の一部になるべきものである。挿話の終りの方は、隆家の語りという内容形式になっているのだが、最初の方は、「いとほしくて」が道長の感情表現であることに示されているように、道長側の視点で書き出されている。この分裂は、道長の本能的とも言うべき懐柔ぶりと、隆家の誇り高いが善良な受けとめ方と、二つの内容を一つにして描こうとしたために生じたのであろう。

第二の挿話は、土御門邸における御遊の時の道長と隆家との応酬で、これも帰洛後のことである。第三の、敦康親王の立太子をめぐる短かい挿話も、帰洛後のことで、「けり」叙述で終始している。一箇所、「世の人は『……』とぞ思ひ申しためりしかども」とあるのは、世人の噂を世継が直接耳にしたという表現であるから、矛盾はない。

ところが、第四の三条院の大嘗会御禊の時の挿話は「き」叙述になっている。

三条院の大嘗会御禊に、きらめかせ給へりしさまなどこそ、常よりもことなりしか。人の、この際は、さりとともくづほれ給ひなむ、と思ひたりし所をたがへむと、思したりしなめり。さやうなる所のおはしまししなり。節会・行幸には、掻練襲奉らぬことなるを、単衣を青くてつけさせ給へれば、紅葉襲にてぞ見えける。表の御袴、竜胆の二重織物にて、いとめでたくけうらにこそ、きらめかせ給へりしか。

これは、語り手世継が直接に見た風景として語っていることになる。身分上、当然あり得ることだが、その中で一箇所、「紅葉襲にてぞ見えける」とあるのは、世継が充分に確認できなかったことという感覚を示して、話に現実性を加味したものであるう。

第五の、眼病から太宰大貳を希望して行く挿話も、この語りの基本姿勢を受けて、やはり「き」叙述で語られて行く。文中、一箇所だけ『「こころみにならばや』と申し給ふければ』とあるのは、世継の知らない所での隆家の言動をとらえた表現である。

挿話の後半で、

かの国におはしまししほど、刀夷国の者にはかにこの国を討ち取らむとや思ひけむ、越え来たりけるに、筑紫にはかねて用意もなく、大貳殿、弓矢の本末も知り給はねば、いかがと思しけれど、大和心かしこくおはする人にて、筑後・肥前・肥後、九国の人をおこし給ふをばさることにて、府の内に仕うまつる人をさへおしこりて、戦はせ給ひければ、かやつが方の者どもいと多く死にけるは。

さは言へど、家高くおはします故に、いみじかりしこと、平らげ給へる殿ぞかし。

時平伝中の道真関係の記事で、平安京における出来事が「き」叙述、遠い筑紫における出来事が「けり」叙述で使い分けられていたように、ここでも筑紫における出来事は「けり」叙述で語られている。その前後は「き」叙述で隆家の状況を述べているが、ふりかえって第四の三条院の大嘗会御禊の時の挿話を世継の直接見た行事と設定して「き」叙述にしたのは、この第五の挿話における使い分けを意識して、その前哨とするためでもあったのではあるまいか。

以下でも、もう一回、筑紫関係の記事を「けり」叙述で語って、この挿話の最後を次のようにまとめている。

このほどのこともかくいみじうしたため給へるに、入道殿、なほこの帥殿を捨てぬものに思ひ聞えさせ給へるなり。さればにや、世にもいとふり捨てがたき覺えにてこそおはすめれ。御門には、いつかは馬・車の三つ四つ絶ゆる時ある。また、道もさりあへず立つ折もあるぞかし。

「このほどのこともかくいみじうしたため給へるに」は、筑紫における隆家の処置をさしているのだが、「も」とあるように、第一の挿話からの全体を受けたまじめにもふさわしい。したがってこのあと、第六の挿話は「まことに世にあひて華やぎ給へりし折、この帥殿は花山院とあらがひごと申させ給へりしほどよ。いと不思議なりしことぞかし」と、やや時間をさかのぼって、隆家が長和三年（一〇一三）太宰府に着任する以前、花山院の側からすれば、熊野修行の生活をへて洛中で在俗同様の生活にはいった正暦三年（九九二）頃から崩御の寛弘五年（一〇〇八）までの間の出来事になる。

年時順の配列を無視して、隆家関係の挿話の最後になぜこの話を置いたか、大鏡全体を通じて花山院の登場する説話をふりかえって考えてみたい。

## 五 花山院関係の挿話について

この話の内容は、『わぬしなりとも、わが門はえ渡らじ』と仰せられければ……以下、「……院は勝ちえさせ給へりけるを、いみじと思したるさまも、事しもあれ、まことしき事のやうなり」と「けり」叙述で終始して

いる。牛車に乗ったまま花山院邸の門前を通れるかどうか、通すまいと大石や杖など用意して打ちかかるといふような自由奔放な喧嘩こそ、作者の好む所であるが、さきに引いた下谷雅美氏の論によれば、この挿話は、伊周が後一条帝誕生の七夜に序代を書いて、世の不評を買う挿話と、対照的に配列されていることになる。まさにその通りで、王威に対し二人は、最終的にとも「王威はいみじきもの」と感ずるのだけれども、少なくとも伊周が卑屈であるのに、隆家は対等にわたり合おうとするところに、対照の効果を考えたのである。

なお丹波正三氏「大鏡における花山院説話の性格」(平安文学研究五〇号昭48・7)は、『大鏡』のほか『栄花物語』その他に収められた花山院説話を調査分類し、『大鏡』では院の性格が異常面で深くとらえられ『栄花』では好色面に中心を置いていること、『栄花』が時の流れにしたがって群像の一人としてとられているのに対し、『大鏡』は人物中心であるがゆえに掘り下げが深まっているという相違を指摘している。また平出克彦氏「『大鏡』にみる作者の花山院観」(『大和物語・大鏡探求』二松学舎大雨海研究室昭60刊所収)は、総体として花山院がどう描かれているかをまとめて有益である。それらに対し私は、道長伝へ運んで行く過程の上で、どういふ節目に花山院挿話が位置づけられているか、『大鏡』の構成面から考えてみたい。

なおその場合、「女君一所は、花山院の御時の女御、いみじう時におはせしほどに、失せ給ひにき」(為光伝)のように、花山院の母あるいは後宮の女性について簡単に触れた所——他に実頼伝、頼忠伝、師輔伝、伊尹伝の一部、兼通伝で「花山院」の名が出てくる所は、除く。また道隆伝で、「またの年、花山院の御こと出でて来て御官位とられて……」と、伊周の失脚に触れるところも、今は別にしてよい程度の叙述である。

そうすると、帝紀における花山天皇紀(第一)、伊尹伝の後半で伊尹の子義懐にからんで長く語られる花山院の逸話の数々(第二く第九)、そしてこの道隆の子隆家との交渉の逸話(第一〇)、道長伝における胆試し挿話(第一一)、雑々物語における石清水臨時祭の時のこと(第二二)が、『大鏡』全体を通じてまとまった花山院挿話となる。

第一の帝紀における挿話は、言うまでもない。系譜的なことを「き」叙述で語ったあと、「けり」叙述で退位

事件を紹介する。直接の行動者は道兼で、その父兼家（大入道殿）は遠景として背後にいる登場のさせ方である。別の資料では、兼家は道隆・道綱にも命じて事件に関与させているようだが、『大鏡』は他の兄弟の名を略して、もっぱら道兼を悪役としており、その結果、道隆伝に続く道兼伝において「……粟田殿（道兼）花山院すかしおろし奉り……」「……そのゆゑは、花山院をば我こそすかしおろし奉りたれ、されば関白をも譲らせ給ふべきなり、といふ御恨みなりけり」という言辞が見える。

伊尹伝では、「また一条摂政殿（伊尹）の御男子、花山院の御時、帝の御舅にて、義懐の中納言と聞こえし」と義懐を紹介したあと、「内劣りの外めでた」と評される花山院について、八話に及ぶ挿話をつらねている。

その第一、全体を通しては第二の挿話は、賀茂の臨時祭に舞人の乗る馬に花山天皇が乗って興じた浅ましいふるまいを、義懐がたくみに收拾した話である。花山院にとって名譽な話ではないから、「けり」叙述で語られているが、注意すべきは、

この入道殿（道長）も舞人にておはしましければ、この頃、語らせ給ふなるを、伝へて承はるなり。

と、道長の見聞したことが、彼の絶頂期、道長の口から語られたのが伝わったのだという紹介をしていることである。この挿話の末尾には、あたかも総評のように、

これならず、ひたぶるに色にはいたくも見えず、ただ御本性のけしからぬさまに見えさせ給へば、いと大事にぞ。されば源民部卿（俊賢）は、「冷泉院の狂ひよりは、花山院の狂ひは術なきものなれ」と申し給ひければ、入道殿は、「いと不便なることをも申さるるかな」と仰せられながら、いとみじう笑はせ給ひけり。

とある文章中でも、花山院を批評し、見る人として道長が登場しているのである。この俊賢と道長の姿の意味するところについては、さきに引いた小峯和明氏の論のあるところである。

第三の挿話以下は、ほぼ年代順に並んでいる。

この義懐の中納言の御出家、惟成の舟の勧め聞こえられたりけるとぞ。いみじう至りありける人にて、

「今さらに、よそ人にて交らひ給はむ見苦しかりなむ」と聞こえさせければ、げにさもといとど思して、なり給ひに<sub>し</sub>を、もとよりおこし給はぬ道心なれば、いかかと人思ひ聞こえしかど、落ち居給へる御心の本性なれば、懈怠なく行ひ給ひて、失せ給ひに<sub>し</sub>ぞかし。

義懐の出家について、惟成の弁と応酬している過去については「けり」叙述で、出家してしまつてからのちについては「き」叙述でという使い分けて、事の進行が語られている。このあとには義懐の子たちについて述べて第三の挿話を結ぶ。

第四の挿話から、花山院その人の話になるのだが、その最初は花山院の熊野修行を現在形叙述で語り、験競べについては「けり」叙述、批評は現在形叙述で結んでいる。批評の部分は次の通りである。

それ、さることに侍り。験も品によることなれば、いみじき行ひ人なりとも、いかでかならずらひ申さむ。前生の御戒力に、また国王の位を捨て給へる出家の御功德、限りなき御事にこそおはしますらめ。行末までも、さばかりならせ給ひなむ御心には、懈怠せさせ給ふべきことかはな。

このあと第五話が、

それに、いとあやしくならせ給ひに<sub>し</sub>御心あやまちも、ただ御物怪のし奉りぬるにこそは侍めりしか。中にも冷泉院の雨の院におはしましし時、焼亡ありし夜、御とぶらひに参らせ給へりし有様こそ、不思議にさぶらひしか。

と「き」叙述で展開する。世継自身が「……さまざま興あることをも見聞くなかと、おほえさぶらひし」と語るように、彼が直接見たことである。末尾が、

明順の主の「庭火、いと猛なりや」と宣へりけるにこそ、万人え耐へず笑ひ給ひにけれ。

という一文であるのは、世継の直接見聞に基づいた感想とは別に、世人の感想評価を「けり」叙述で示したのである。

第六の挿話も「き」叙述で語られるが、その末尾の、

かかればこそ、民部卿殿（俊賢）の御言ひごとは、げにとおぼゆれ。

は、第二話の末尾の評としてあった源俊賢の言葉「冷泉院の狂ひよりは、花山院の狂ひは、術なきものなれ」と照応するもので、ここまですべてが花山院挿話の一まとまりであることを示す。したがってこれから以下の挿話が、今度はずべて花山院の才能の高さを評価するものであることも、うなずける。作者は明らかに、花山院の狂気のマインスマと、それがもたらす一面のプラス面とを、同一の人物の内に見ているのであって、それを世継にさりげなく語らせている。

そういう群の中の第一話すなわち全体を通しては第七の挿話は、和歌についての才能に触れたものである。全体を現在形叙述で語って、

まことにさる御心にも、祝ひ申さむと思し召しける悲しきよ。

と、語り手が花山院の心中を臆測する結びの一文にだけ「けり」が使われている。

第八の挿話は、「この花山院は、風流者にさへおはしましけるこそ」と詠歎的に語り出して、御所、車宿り、調度品などに数々の工夫をこらした状況を、「き」叙述を基本に語るが、中に「……御誦経にせられたりし御観の箱見給へき」とあるように、その具体的事実について語り手が確かに見たという気持ちをごめての語り口である。

第九の挿話は、造園、車や沓についての工夫、絵と、いずれも基本は同じなので、くりかえさない。その中で「入道殿、競馬せさせ給ひし日」と、道長とのかかわりが示されていることのみ注意したい。

以上、伊尹伝後半における花山院関係の挿話をまとめると、最初、伊尹の子義懐とのからみで性格破綻の面が取り上げられ、それを距離を置いて見ている道長側の評価が重ねられている。ついで源俊賢の「冷泉院の狂ひよりは、花山院の狂ひは術なき」という言葉の例として（第二）、現在形で語り出された挿話が「き」叙述に変わり（第五）、それは語り手世継の直接見聞を語る口調になって、俊賢の言葉の肯定となって結ぶ（第六）。最後に、その口調のまま花山院の多くの才能を讚美しつつ（第七、八、九）、その才能の開花が、道長の主催行事での

衣装のデザインにまで及ぶことを述べて結んでいる。

これを帝紀における記事からの流れで理解すると、退位事件においては道兼を悪役として、花山院をあわれな同情すべき悲劇の主人公と造型し、ついでここではその悲劇の原因ともいべき院の狂気とそれを注視している道長とを並べ、狂気のプラス面としての文化的才能とそれを發揮する場である道長の世界の存在を示して、道長伝へつないで行こうとするのである。もとよりその場合の道長は、憎まれ口は腹心の俊賢に言わせて、自分は狂気の廃帝をも包みこむ偉大な存在としてのイメージを持っているのである。

その道長伝における花山院は、胆力をくらべる場を設営して、三兄弟の能力をテストし、結果として道長の剛気勇気が最終権力者としての性格にふさわしいものとなる契機を作っている。そういう道長伝へのつながる過程として、隆家と花山院との楽しいあらがいは、いわば敗者同士の君臣和楽の世界を提示したのではあるまいか。そしてそれが、道長の輝かしさを示すものではあっても、若き日の彼の、花山院との君臣和楽の世界へという理解につながるであろう。

道長伝の終りに昔々物語として、花山院の御代にあった、円融院と藤原兼家、実資、源雅信など、旧主と臣下のうるわしい交情の場面を置いたのも、この延長線上に位置させることができよう。『大鏡』の中で花山院関係の記事は、このように配置され、道隆伝の末尾に添えられた隆家と花山院の挿話も、その流れの一端を荷なっているのである。

道長伝を考える上に、三条院と花山院とは大きな意味を持つ二帝である。早く小峯和明氏は、すでに引いた論文で、三条院と道長とのかわりを分析して、語り手としての道長の持つ大きな意味を指摘している。さらに花山院に対しても、道長と源俊賢がどのように花山院を見ていたか、語りの構造と響かせて説いている。私の以上の論も、その指摘と矛盾するものではない。花山院挿話が紀伝体の中で無意味に並べられているものではなく、作品全体が道長伝へ集約して行く、その流れの上に一つ一つが意味づけられているものであることに注意したのである。

## 六 余説——道長伝の中の伊周

なお、道長伝においても、伊周との確執の跡は色濃くうかがえる。道長の幸運が、長徳元年の流行病による多くの公卿の死にはじまったことを述べて、その時も「帥殿の御心持ちのさまましくおはしますば、父大殿の御病のほど、天下執行の宣旨下り給へりしままに、おのづからさてもやおはしますさまし」と語るのは、伊周の器量のなさを嘆くことから、直接に道長を礼讃していることにはならないだろう。

しかも道長の詩歌の才、若き日の剛胆さを讚美したあと、「故女院（詮子）の御修法して、飯室の権僧正のおはしましし伴僧にて、相人のさぶらひし」を、侍女たちが呼んで人々の人相から吉凶を占ってもらう挿話は、次のように語られる。

「内大臣殿（道隆）はいかががおはす」など問ふに、「いとかしこうおはします。天下取る相おはします。中宮大夫殿（道長）こそいみじうおはします」といふ。

また栗田殿（道兼）を問ひ奉れば、「それもまた、いとかしこくおはします。大臣の相おはします。また、「あはれ中宮大夫殿こそいみじうおはします」といふ。

また権大納言殿（伊周）を問ひ奉れば、「それもいとやむごとなくおはします。雷の相なむおはする」と申しければ、「雷はいかなるぞ」と問ふに、「一際はいと高く鳴れど、後遂げのなきなり。されば御末いかがおはしますと見えたり。中宮大夫殿こそ限りなく際なくおはします」と、別人を問ひ奉るたびに、この入道殿（道長）を必ず引き添へ奉りて申す。……

と、道長の相が抜群であって、人相見の言があつた挿話を語る。この挿話は、登場人物の状況が一致する時点がないことから、諸注釈書は、道長礼讃のための創作談とするのがふつうである。

それはそれでよいのだが、この挿話のあとに、世継の次のような感想が付くことが問題である。

いみじかりける（この「けり」は詠嘆） 上手かな。当て違はせ給へることやおはしますめる。帥の大臣

(伊周)の、大臣までかくすがやかに給へりしを、「はじめよし」とは言ひけるなめり。雷は落ちぬれど、またもあがるものを、星の落ちて石となるにぞたとふべきや。それこそ返りあがることなけれ。

「いみじかりける上手かな」と語りおこして道長の方に話が行くなら、礼讃談として完結する。ところが世継は、伊周の運命も適中していることに話を進め、人相見は伊周の運命を「雷」にたとえたが、雷なら落ちてもう一度天にもどるのだから、落ちて石となってしまう「星」にたとえればよかったのに、と、一矢を報いている。この感想は、伊周に同情した言辭になるのではあるまいか。ましてや「雷」の語は、菅原道真の死後を思いおこさせ、だから世継は人相見が「雷」にたとえたことを不適当と言って、「返りあがること」のなかった伊周を傷んでいたのである。この、道真を想起させる所は、さきに伊周関係の挿話で注意した所と、軌を一にするのである。

こうして、伊周に対する同情あるいは哀惜の念を底流にひめて、しかし以後、不遇時の道長が伊周との競射に勝つ挿話——そこでも世継の感想は「人の御さまの、言ひ出で給ふことの趣きより、片へ(伊周)は臆せられ給ふなめり」とあるが——、東三条院の石山詣での時の挿話、上巳の袂への挿話を重ねて、伊周は卑小化され、道長は圧倒的な力量の持ち主として造型されて行く。

それは最終的に、東三条院の道長の肩入れ挿話に持って行くための布石である。

女院は、入道殿をとりわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿はうとうとしくもてなさせ給へりけり。帝、皇后宮(定子)をねんごろに時めかせ給ふゆかりに、帥殿は明け暮れ御前にさぶらはせ給ひて、入道殿をばさらにも申さず、女院をもよからず事に触れて申させ給ふを、おのづから心得やさせ給ひけむ、いと本意なき事に思し召しける、ことをわりなりな。

道長が最終の勝者となる決定的なものは、伊周をきらった東三条院の力であったということ、これこそ『大鏡』作者が帝紀の叙述からこだわりつけてきた女の力の發揮されたクライマックスである。この場面をもって道長伝が結ばれるのも、理由あることであつた。